

ジャネット・

ジャクソンと

80's
ディーバたち

西寺郷太

マドンナ、

ホイットニーらとの

対比列伝があぶり出す、

ジャネット・ジャクソンの

音楽的革命と

サバイバルの秘密!

Janet is
ジャネット is グレート!
GREAT!

ジャネット・ジャクソンと
80's
ディーバたち

西寺郷太


星海社

96



SEIKAISHA
SHINSHO





あなたの妹であることは、
私の誇りです。
そして、大好きよ。本当よ。

—— シャネット・シャクソン

1993年2月24日第35回グラミー賞授賞式典にて

はじめに 11

“Follow Your Dreams Wherever They May Lead” 12

80年代ポップスの「空洞」 13

今、何故ジャネット・ジャクソンについて考えるのか？ 16

大河ドラマのように 19

ジャネットの「不在」 21

ジャネットの「味」 23

1986年以降の「ポップ・ミュージック史」はジャネットが創り出した 26

呼ばれなかった三人

奇跡の夜 32

ホイットニー・ヒューストン —— 存在しない歌姫 35

ホイットニー・ヒューストン —— 容赦なく、徹底的に 39

ホイットニー・ヒューストン —— 「戦略」に抱かれて 42

マドンナ —— ロサンゼルスには、いたけれど 45

マドンナ —— 「彩られた」経歴 48

マドンナ —— 「USA・フォー・アフリカ」を蹴落とす 51

ジャネット・ジャクソン —— 異なる運命 55

ジャネット・ジャクソン —— 結婚と破綻 57

ジャネット・ジャクソン —— 「ジャクソン」の名を捨てて 60

第
2
章

《コントロー》前夜 63

1985年に何が終わり、1986年に何が始まったのか

ライブ・エイドの狂騒 66

ヌード・スキヤンダル 68

マドンナの天下獲り 71

《サン・シテイ》の衝撃 74

《サン・シテイ》後の世界 78

誇らしげな表情の理由 80

フィクションから、ノンフィクションへ 83

ワム!の受難 86

ポップスの「終わり」 89

カルチャー・クラブとデュラン・デュランの混迷 92

第3章

驢馬（ドンク）の「リアル」

99

ジョーの哀しみ 102

ウエルカム・トゥ・カリフォルニア！ 104

「盗まれた」息子達 107

成功の代償 110

執念のラスヴェガス 113

驢馬（ドンク）と呼ばれた少女 115

ロミオとジュリエット'84 117

必ず聴くべし！ 《ヤング・ラヴ》 121

「ヴィクトリー・ツアー」の裏側で 123

予防接種な《ドリーム・ストーリー》 127

予兆 134

親離れとミネアポリス 138

ジャネット成功の真の立役者は誰か？ 141

ファンタジーから、リアルへ 146

革命のポイント 149

フォロワー達の行進 153

《リズム・ネイション 1814》 158

意外なる接点 162

予防接種のあるなしで 165

痛恨のポロリ 169

第5章

80's
ディーバのサバイバル

175

「ホイットニーの旦那」 178

首都高指輪伝説 181

それぞれの「グッド・ラヴ」 184

生涯、横綱であるということ 188

57歳のヘライク・ア・ヴァージン 192

マドンナと美空ひばり 195

シンディと日の丸 196

「ジャクソン家」のサダメ 200

永遠の《アンブレイカブル》 203

「家業」を継ぐ人 206

あとがき

226

主要参考文献

234

は
し
め
に

“Follow Your Dreams Wherever They May Lead”

2013年11月14日、晴れた午後のこと。僕はカリフォルニアらしいどこまでも果てしなく透き通った青空の下、初めて訪れたヘイヴンハースト通り4641番地にあるその家の敷地内をゆつくりと歩いていました。右手に不意に現れた——写真集などで見覚えのある——プールに気をとられつつ、ふと斜め前方を見上げた瞬間。高さ3メートルほどの場所にある、少し古びて色褪せたレンガ色のプレートに目の焦点が合いました。そこには「ピーターパン」や「不思議の国のアリス」の物語の挿絵で見るような美しい飾り文字で、こんな言葉が刻まれていました。

“Follow Your Dreams Wherever They May Lead”

「夢を追いかけなさい。そうすれば、その夢が君をどんな場所にだって導いてくれるよ……」
そこだけ取り出せば、とてもシンプルかつ、童話などでよく繰り返される、ありきたりの標語のようにも思えるかもしれません。しかし、僕がそのパネルと巡り合った場所が、ロサンゼルス市の中心部から20キロほど離れた高級住宅街エンシノ、ヘイヴンハースト通り沿いにある「ジャクソン邸」の裏庭だったこと。そして、その言葉を選び、掲げたのが若き日のマイケル・ジャクソンだった、と説明すれば、少しは僕が受けた衝撃の意味が伝

わるかもしれませんが。

「まさに自分は、この場所に、あなたとあなたの御家族によって『導かれて』きたんですよね……」

それは単なる比喻ではありませんでした。実際にこの日、僕はジャクソン5、ジャクソンのギタリストであり、互いに友達と呼ぶ間柄となったジャクソン兄弟次男のティト・ジャクソンの運転する車で、彼らが幼少期・青年期を過ごした「実家」を訪れていたのです。

80年代ポップスの「空洞」

これまで、2009年6月25日のマイケル逝去の知らせを受け追悼本として書き上げた『新しい「マイケル・ジャクソン」の教科書』（ヒネス社）、彼を襲った二度に渡る「少年性的虐待訴訟」問題の根本を検証した『マイケル・ジャクソン』（講談社現代新書）と、僕はマイケルを主人公とする2冊の著作を発表してきました。

これらの上梓以降、僕には息つく暇もないほどに次々と使命が与えられ、激流に呑み込まれる中でマイケルとジャクソン・ファミリーの素晴らしさを伝え続ける日々が数年間続

きました。

時の流れはあつという間。

今では信じられないかもしれませんが——コアな音楽ファンの中で一定の音楽的リス
ペクトは続いていたものの——90年代中盤からゼロ年代にかけては「マイケルを軽蔑し、
断罪し、嘲笑すること」が、タブロイド紙や、テレビ報道、ネット・ニュースを信じる一
般大衆のスタンダードな風潮でした。擁護すれば、一斉に袋叩きに遭うのが関の山。それ
が、「死」と生前のライヴ・リハーサル映像を編集したドキュメンタリー映画『マイケル・
ジャクソン『THIS IS IT』の公開をきっかけに絶対的再評価へと激変したのです。

現在では、一時期の猫も杓子もといった狂乱のマイケル・ブームは落ち着いたものの、
彼の音楽作品、映像作品に触れた確かなファンが育っています。先述の2作の著作も多く
の読者を得たことで、僕自身が偉大なマイケル個人に関して、何か新しく公式なアクショ
ンを起こす必要性は薄れていきました。

* * *

そんな中、僕の次なる目標は「80年代音楽という大樹の幹を多角的に補完しながら、自分なりの解釈、歴史をしつかりと書き残すこと」に設定し直されました。再評価すべき対象は、マイケルだけではないのです。

80年代ポップスは「MTV」や「映画」などわかりやすい映像と密接に結びついていたからでしょうか。楽曲もヒットし、アーティストも長く愛され続けている割にはそれぞれ音楽性が研究されたり、ゼロから歴史を理解するための取扱説明書のような本や文献がほとんどないのが現状でした。同時代を生きた者には暗黙の了解ばかりのことでも、それ以降の世代への断絶が甚だしい。例えば僕が1960年代のビートルズやローリング・ストーンズ、モータウン・ミュージックなどをリアルタイムで体験していないのに夢中になったのは、1970年代のレッド・ツェッペリンやスライ&ザ・ファミリー・ストーンを最初はよくわからないながらも大好きになれたのは、諸先輩方が記された数々の書籍や、ラジオなどでのトークがあつたからです。特に「洋楽」と呼ばれるジャンルに限定すれば、インターネットやスマートフォンでこれだけ簡単に情報の洪水を浴びている現在の方が、むしろ30年前よりも感覚が退化してしまったのではないか、そんな風に思うことさえあります。それは単純に若者達に音楽というゲームの「ルール」、歴史の流れを教える人がいな

いからではないでしょうか。いないなら、誰かが買ってでなければなりません。

今、何故ジャネット・ジャクソンについて考えるのか？

そんな想いの中で、昨年、僕は二つのテーマに取り掛かりました。

一つ目は1985年春に発表された、当時のアメリカン・ポップスのオールスターが発表したチャリティ・ソング「ヘイ・アー・ザ・ワールド」について。『ウィ・アー・ザ・ワールドの呪い』（NHK出版新書）では、このプロジェクトがその後のポップ・ミュージックにもたらした影響を考察、その上で「1985年でアメリカン・ポップスの黄金時代は終わった」との自説を展開しています。このことは本書『ジャネット・ジャクソンと80'sデイバたち』で書かれるテーマとも密接に関わってきます。後述します。

そして、もう一つの大きな仕事は、マイケルの生涯最大のライバルであった同い年の天才、プリンスの入門書として2015年秋に発表した『プリンス論』（新潮新書）でした。80年代音楽の最重要人物の一人であり、一時期は音楽ジャーナリズムから神のように褒め称えられていたはずのプリンス。しかし、そんなプリンスであっても、彼に関する日本人が書いた書籍が一冊もないのは驚くべき事実でした。毎年途切れることなく、エネルギー

に作品をリリースしニュースを届け続けてくれる、まさに現在進行形の彼だからこそ、その「空洞」を埋めなければならぬ。僕は、そう考えたんです。しばらく日本盤が権利関係の問題で発売されてこなかったプリンス。ここ数年、久々にメジャー・レーベルからの流通が再開され、来日公演の可能性も格段に上がっていました。そんな矢先、2016年4月に訪れた突然の訃報。いてもたってもいられずに僕は5月上旬、彼の本拠地ミネソタ州ミネアポリスに追悼と現地取材の旅に出ました。しかし、それでも今なお、プリンスが亡くなってしまったという事実を信じられません。

* * *

本作は、1986年2月4日に発表された傑作アルバム《コントロール》以降、真摯なメッセージ性を秘めたダンスアブルな音楽性とフレンドリーな魅力で、世界中の女性アーティストに影響を与え続けたジャネット・ジャクソンを主人公に据えた日本初の書籍となります。自分にとってジャクソン・ファミリー関連作品の集大成であり、「準主役」として1980年代後半を彩った女性アーティスト、ホイットニー・ヒューストン、マドンナが登

場します。いわゆる音楽本（特に洋楽で）を書き下ろすのは、これが最後との決意を固めています。

本書を手にとって頂いた方であれば、ジャネットがどんな兄を持つかご存知でしょう。ジャネット・ジャクソンは、ジャクソン家・六男三女の末妹。1966年生まれの彼女が物心つく頃、上の5人の兄達——長男ジャッキー、次男ティト、三男ジャーメイン、四男マローン、五男マイケル——で結成されたジャクソン5は、ティーン・アイドルとしての絶頂期。押しも押されぬ国民的スターとして日夜、世界中で歌い踊っていました。ジャネットが生きてきたのは常に「ジャクソン家の末娘」としてお茶の間から認識され、兄達のファンやパラッチのカメラに囲まれる生活でした。

とりわけ1979年のアルバム《オフ・ザ・ウォール》でマイケルがソロ・アーティストとして突出した成功を収めてからというもの「マイケルの妹」という強固なレッテルが、剥がしても剥がしても彼女の人生にこびりついてゆくようになります。通常なら、偉大な兄の呪縛から逃れようとしても逃れられない、そんな人生だったはずです。通常ならば……。

大河ドラマのように

僕が「どうしてもジャネットについて書かなければならない」と強く思う理由は、彼女ほどスピリチュアルに自分の運命と向き合った人間はいない、そう考えるからです。

マイケルとも8歳の年齢差があるジャネットは、貧しい暮らしの中で下積み時代を経験した兄妹と違い、最初からお金がある生活しか知りません。気がつけば、周囲はセレブリティだらけ。僕が訪れたヘイヴンハーストの邸宅にジャクソン家が引越してきたのは、母親キャサリンが42歳の誕生日を迎えた翌日、1971年5月5日のことです。この時点でジャネットはわずか5歳。自分の最初の記憶を振り絞って思い返してみても欲しいのです。5歳頃のことはまだ曖昧ではないでしょうか。

ジャネットはお姫様のようなお屋敷暮らしの中で育ち、自分自身でやりたいことを考えられる年齢に達する前に子役としてテレビドラマで活躍し有名になっていました。そんな彼女のモチベーションに、例えばマドンナのように35ドル(当時のレートで9450円)だけを握りしめ家出同然でニューヨークに「上京」し、タイムズスクエアの中心に立って『私はこの世界で神よりも有名になるわ!』などと叫ぶ、なんていう上昇志向はそもそももないのです。最初からジャネットは「お金持ち」の「有名人」だった。でも……、彼女は飢え

ていた。恵まれつつも限りなく過酷な境遇の中で、なぜ彼女は運命と闘ったのか。「ジャクソン家の妹」「マイケルの妹」だけではない、一人の「ジャネット」という女性として、自分の足で荒れ狂う暴風雨の中をしつかりと踏みしめる、そのため……。だからこそ、ジャネットの生き方は尊いし、学ぶことが多い。僕はそう思うのです。

本作では、80年代ポップ・ミュージック史を戦国時代に見立て、まるで織田信長、豊臣秀吉、徳川家康など武将達が群雄割拠でサバイバルする中を、全力で生き抜くヒロインとしてジャネットを描きたいと考えています。僕の大好きなNHKの大河ドラマ的にあらずじをまとめると(有働由美子アナウンサーの声で読んでいることを想像してください)、

「ジャネット・ジャクソンが物心つく頃、5人の兄達によるコーラス・グループ『ジャクソン5』は国民的アイドルとなっていた。大家族ジャクソン家は、大衆に愛される。彼女の『親友』、そして最大の壁は兄マイケル・ジャクソン。やがてジャネットは傍若無人に自分の人生をコントロールし続ける父親ジョーをマネージャーから外す決断を下し、『ジャクソン家』に生まれた運命からの、独り立ちを決意する……」

むしろ、まったくジャクソン・ファミリーにも、音楽にも詳しくないよ、という方にこそ、YouTubeや、ストリーミング、もちろんCDなどでジャネットの素晴らしい楽曲を探して聴きながら面白く読んで頂きたい、そう思っています。

「ジャネットの「不在」

彼女の「生き方」そのものがとてもドラマティックだということはすでに書きました。僕がこの本の執筆に取り掛からねばならなかった、最大の理由を記したいと思います。それはジャネットの音楽が90年代以降の歌手達にもたらした影響の巨大さと、現状の「評価の釣りあわなさ」にあります。

近年「マイケル・ジャクソン」「プリンス」について書籍をまとめ、ミュージシャンとして考察と実践を繰り返してきて改めて思うのが、彼らの天才性でした。同い歳の友人で、大のプリンス・フリークであるZAZEN BOYSの向井秀徳君の表現を借りれば、プリンスは「毒個性」の塊。確かに彼には「音にも姿形にも毒薬のような個性」があります。同じく宿命のライバルであったマイケル・ジャクソンの唱法、ダンス、ファッション、個性が圧倒的なことを否定する人はいないでしょう。

でも、実はここは難しいんですが、そういう究極に個性的な音楽家のサウンド、ヴォーカリゼーション、ビート感って実は新しい世代が何かをクリエイトする場合には取り入れづらいのです。もちろん80年代の音楽シーンを牽引したマイケルやプリンスの影響やオマー・ジューは、それ以降のアーティスト達に脈々と受け継がれています。でも、それはあくまでも「マイケル風」「プリンス風」というすぐにわかりやすく浮き上がった特徴、もっと言えば「真似」として目に見えたり、聴こえたりしやすいからこそ強い印象を残すのではないのでしょうか。

例えば、食材で言うなればマイケルやプリンスの個性は「カレーのルー」とか、「キムチ」に似ていて、それを入れてしまうと何もかもその味になってしまう（悪い意味ではありません）。カレーうどん、カレーピラフ、キムチ鍋、キムチ炒飯など、どんな料理でもすべてをカレー味やキムチ味の強烈なフレーバーが支配してしまおう。

カレーやキムチは美味しいですが毎日毎日だと飽きてしまいますよね。90年代には、その強烈さゆえにマイケルやプリンスの音楽性やファッションは一部のコアなファン以外には敬遠されてしまったわけです。「コア」と言えども莫大な人数を抱えていたことが彼らの凄まじさですが、少なくとも時代の革命児として二人がシーンを塗り替え続けた80年代は

どには「ウェルカム」な状態ではなかった。流行から外れた、彼らの「オリジナリテイ」が真の意味で再評価されるのは、プリンスならば「これぞプリンス！」という自身のシグネチャー・サウンドを客観性を持つて再構築した2004年の《ミュージコロジー》、寡作になってしまったマイケルは前述のドキュメンタリー映画『マイケル・ジャクソン THE LAST』公開からということになると思います。

ジャネットの「味」

では実際は誰が、ヘヴィ・アー・ザ・ワールドで以降、つまり1986年以降のポップ・ミュージックを本当に革新し、90年代を彩るフォロワーを世界中に生み出したのか……。僕はそれがジャネットだと思うのです。特に1986年2月の《コントロール》、1989年9月の《リズム・ネイション 1814》、そして1993年5月の《Janet》という怒濤の名作アルバム3連打は、その先の音楽が進むであろう航海図を完璧に示していました。本当かよ！ こじつげだ！ と仰る方は、日本でも90年代中盤から後半にかけて安室奈美恵さん、宇多田ヒカルさんを筆頭にジャネットの影響を受けた女性シンガー達が大きな支持を集めたことを思い出して欲しいのです。これは単なる印象論ではありません。安室

奈美恵さんはジャネットへの愛と憧れを公言し、《リズム・ネイション 1814》以降のアルバムに特徴的な楽曲間に短いインタールードを挟む「ジャネット・スタイル」を取り入れていたほど。そして宇多田ヒカルさんのデビュー・シングル《Automatic》がリリースされたのは1998年12月。日本音楽史のあらゆる記録を塗り替えることになる僅か15歳の彼女の衝撃的なデビューは、ジャネットがシングルへそれが愛というものだから（That's the way love goes）などでヒップ・ホップ的メロウ・グルーヴ路線を確立したアルバム《Janet.》からちょうど5年後。

翌1999年11月にリリースされた《Addicted To You》、そして《Wait & See》リリースくくくではジャネット・サウンドの統括者であるジミー・ジャム&テリー・ルイスが、直接宇多田ヒカル作品にプロデューサーとして関わったことでも音楽ファンの度肝を抜きました。J-POPが一番売れた時代、日本中に愛された二人の歌姫が最もストリートに影響を「公言」した存在はジャネットだった、このことはもう一度思い返されるべきことだと思います。

彼女達はそれまでのソウル・シンガーのように必要以上に声を張り上げたり、イントロやアウトロで必要以上にフェイクを披露するなど「歌が上手いでしょう？」と悦に入るこ

とはしない。むしろ低音のウイスパーク・ヴォイスや、話しかけるように軽やかなフィーリングでありながらリズムの上にビシッと声を乗せてゆく、ヒップ・ホップ的解釈に満ちたそのドライな唱法が特徴でした。ジャネットの「凄み」は、彼女が世界中の一般大衆に届けた新しい歌唱スタイルやビート解釈がどんなシンガーにも馴染みやすいがゆえに、もはやそれを誰も「ジャネット的」だと感じないレベルにまで浸透させたことにあるのです。あくまでも、自然に……。

マイケルやプリンスを先ほど「カレーのルー」や、「キムチ」だと喩えました。それと言えばジャネットは「昆布出汁^{だし}」を発明したような人ではないか、と僕は思うのです。どんな料理にも入っているけれど、わざわざその出汁の風味について誰も指摘したり感じたりしない。少なくともカレーやキムチほどには……。しかし、もしも出汁がなければ、世の中の料理はまさに「味気ない」ものになっているはず。ジャネットは、驚くべき大きな味覚変革を86年以降のポップ・ミュージック界にもたらしました。しかし、あまりにもその発明がナチュラルに浸透したからこそ、その業績に見合った評価を与えられないまま今の現状がある。

1986年以降の「ポップ・ミュージック史」はジャネットが創り出した

先述の通り、彼女の兄マイケルにも「冬の時代」がありました。その時は彼を軽蔑し、断罪し、嘲笑することがトレンドとなっていました。それに比べれば、ジャネットの「冬の時代」は、良くも悪くも無風なんです。ここ10年ほど、特に我が国でジャネットが話題に上ることは激減してしまいました。何故か忘却され、無関心のままに追いやられている。この状況は打破しなければいけません。

ジャクソン5「直系」のジャネットの人生を追いかければ、老舗モータウン・レコードや、スライ&ザ・ファミリー・ストーンを始めとする1970年代のソウル・ミュージックの歴史と伝統がわかります。そして彼女が真のデビュー作とも言える《コントロール》で組んだプロデューサー、ジミー・ジャム&テリー・ルイスは、プリンスの出身地ミネアポリス育ち。彼らのシンセサイザーを駆使し、縦のリズムを強調させたサウンドは、プリンス一派「ザ・タイム」に所属した切磋琢磨の日々の中で磨かれています。

正直に告白しますが、僕は「ジャネット・ジャクソンにまつわる書籍」を最初からどうしても書きたかったわけではありません。マイケル、プリンス、そしてヘヴィ・アー・ザ・ワールドを研究すればするほどに、実の兄であるマイケルだけでなく、プリンスの「遺

伝子」をも組み合わせて生まれた「ハイブリッド・アーティスト」であるジャネット・ジヤクソンこそが「80年代の戦国時代を終わらせ、現代の音楽世界を構築した」最大のキーパーソンであることに気がついてしまい、書かざるを得なくなつた、それが真相です。そして、ジャネットに迫るためには、彼女と時代を並走したマドンナ、ホイットニー・ヒューストンの歩みにも目を向けなければなりません。その意味で本作は、昨年出版した『ウィ・アー・ザ・ワールドの呪い』（NHK出版新書）の続編、つまり86年以降のアメリカン・ポップス史として読める作品にもなっています。ではまず、第1章では「USA・フォー・アフリカ」に「呼ばれなかつた三人」について。

それぞれの生き様、音楽性を知ることでもあまりにも広範に伝播したためこれまで視認化しづらかつた「ジャネット・ジヤクソン」という特殊な「出汗」の個性が伝わればいいな、と思います。

本作を読み終わる頃には、これまで僕がまとめてきた書籍の視点が皆さんの脳内で立体的に繋がり、新たな素晴らしい音楽世界が広がることを約束します。



三呼ばれなかつた
人

第

1

章



私の家族は

だいたい呼ばれたのよ。

私を除いてね。

傷ついて、ママに向かって

泣いたのを覚えてる。

—— ジャネット・ジャクソン



TELECALC

奇跡の夜

1985年1月28日。

この日、ロサンゼルスを中心部ダウンタウンにあるシュライン・オーデトリウムにおいて「グラミー賞」と並ぶアメリカ音楽界最高峰の祭典「アメリカン・ミュージック・アワード」が盛大に開催された。総合司会は当代きつての人気者、ライオネル・リッチー。この時期のライオネルは、前年夏に行われたロサンゼルス・オリンピックの閉会式で「ヘール・ナイト・ロング」を歌うなど、白人層にも受け入れられやすいシンプルなメロディ、甘い歌声と陽気なキャラクターで「アメリカを代表するエンターティナー」の名をほしいままにしていた。

「アメリカン・ミュージック・アワード」は、業界人の投票によって選ばれる「グラミー賞」と違い、ファンからの投票が反映されて選出される。それゆえ「いかにその一年、一般リスナーに自らの音楽が愛されたのか」が純粹に伝わる人気と直結した賞であり、アーティストにとってノミネートされる興奮と喜びもひとしおだという。しかし、この夜は選ばれた者が美酒を分かち合って終わる例年の祝祭とは少々様子が違った。授賞式で表彰されるためロサンゼルスに集結してきたスター達を、その後更に大きなイベントが待ち構え

ていたのだ。

それこそが、アフリカの飢餓を救うために企画された一大プロジェクト「USA・フォー・アフリカ」であった。アワード終了後の夜22時から翌日の朝まで、シンガー、スタッフが完全徹夜状態の中へウィ・アー・ザ・ワールドは録音された。場所はサンセット・ブルバードとノース・ラ・ブレア・アベニューが交差する、由緒正しきチャーリー・チャップリンのスタジオ跡地に建設されたA&Mスタジオ。同曲は「80年代アメリカン・ポップス」の金字塔として今もなお愛されている。

「USA・フォー・アフリカ」計画を音楽的に取りまとめたのは、ジャズ時代からの長いキャリアを誇り、当時、マイケル・ジャクソンの《スリラー》によってギネスブック世界アルバム売り上げ記録を更新したばかりの名プロデューサー、クインシー・ジョーンズ。作詞・作曲は26歳のマイケルと、35歳のライオネルが担当。ビートルズの「ヘイエスタデイ」へレット・イット・ビー、サイモン&ガーファングルの《明日に架ける橋》のようなシンブルで人種の壁を超えるでっかいアンセム（讃歌）を、というクインシーのオーダーを受け、ヘイヴンハーストのジャクソン邸スタジオにふたりで3日間こもって共作した。

この夜、シンガー、コーラス隊としてスタジオに呼ばれたのは43人。

ひとまとめに「アメリカを代表するレジェンド達」と表現しつつも、世代的に言えば参加者は大きく三つに分けられる。

まずは、60年代、それ以前から活躍していたハリー・ベラフォンテ、レイ・チャールズ、スモーキー・ロビンソン、ウィリー・ネルソン、ケニー・ロジャース、ボブ・ディラン、ダイアナ・ロス、ポール・サイモンなど、すでに1985年の段階でロック、ポップ、フォーク、カントリー、ソウル界の重鎮として長く君臨していた「大御所」組。

そして、二つ目が70年代に活動を軌道に乗せこの時期に円熟期を迎えていた「現役バリバリ」組。

ブルース・スプリングステイン、ビリー・ジョエル、ジャクソンズ（マイケル含む）、ライオネル・リッチー、ダリル・ホール&ジョン・オーツ、ジャーニーのステイヴ・ペリーもそのゾーンに当たる。60年代初頭に若くしてデビューしたステイヴ・ワンダーはヘヴィ・アー・ザ・ワールド参加当時脂の乗り切った35歳。その実績と同業者からも「ミュージシャンズ・ミュージシャン」として尊敬を集める比類なき存在ではあったものの、「大御所」と呼ぶにはまだ早かったかもしれない。

最後が80年代にメジャー・シーンに鮮烈に登場した「新人」組だ。

シンデイ・ローパー、ヒューイ・ルイス&ザ・ニューズ、シーラ・Eなど、それぞれミュージシャンとしての長いキャリアを持つてはいたが、このような晴れ舞台に登場するのは前年からの飛ぶ鳥をも落とす勢いによるものだったと言えるだろう。特に、2番サビ終りの展開部（ブリッジ・パート）でソロをとった「ダミ声のパワー唱法」が個性的なヒューイと、カラフルなロングヘアでチャームिंगな絶叫を聴かせたシンデイ、このふたりは「ウェイ・アー・ザ・ワールド」への参加で、完全にメインストリームの存在に躍り出た。彼らが一般層、お茶の間に届き、いわゆる世界的「キャズム」を超えた夜。それが1985年1月28日だった。

ただし、この歴史的な瞬間に声がかからなかった三人の「新人」がいた……。そして、その三人こそが以後の——80年代後半から90年代にかけて——「メジャー音楽シーン」の牽引役を担うことになる。そのすべてが女性だったことは、1955年に誕生し、30年の日々を重ねてきたそれまでの「ロック、ポップ・ミュージック史」との大きな違いだった。

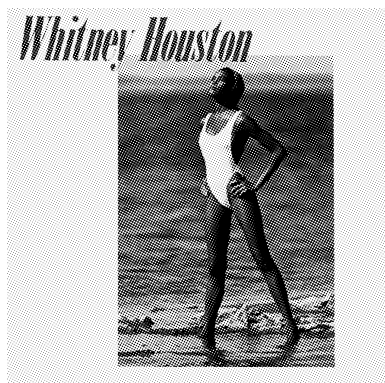
ホイットニー・ヒューストン——存在しない歌姫

歴史に「もしも」はない。

ただ、この奇跡のレコーディングが仮に一年後、1986年1月末に企画されていたならば……。確実に「新人枠」として招聘され、重要なパートを担ったシンガーのひとりだが、歌姫ホイットニー・ヒューストンだろう。

「USA・フォー・アフリカ」プロジェクト発起人のケン・クレイガンは、ある意味公平だった。彼個人の好みではなく、「全米トップ40のチャートを眺め、大衆の支持を得ている上位の者から次々と声をかけた」と証言しているからだ。しかし、輝けるホイットニー・ヒューストンの名は「85年1月」にはチャート誌のどこにも存在しなかった。それも当然。彼女のデビュー・アルバム《そよ風の贈りもの》がアリスタ・レコードから満を持して発売されたのはヘウィ・アー・ザ・ワールド収録直後、1985年2月のことだったからだ。

本名、ホイットニー・エリザベス・ヒューストン。ジャネットより3歳年上の63年8月9日生まれ。出身はニューヨーク州の隣、ハドソン川対岸にあるニュージャーシー州最大の都市ニューアーク。日本に置き換えてみれば、東京の隣、江戸川の向こうに位置する千



《そよ風の贈りもの》(1985年)

[著者私物。アルバムジャケットは以下同]

葉県の柏市や船橋市あたりの育ちだと思おうとそのニュアンスが伝わりやすいかもしれない。

ホイットニーの母親は、シシー・ヒューストン。彼女はアレサ・フランクリン、オーティス・レディング、ウィルソン・ピケット、ジミ・ヘンドリックスといった大物アーティストのバック・コーラスとして定評の高かった「スウィート・インスピレーションズ」の主要メンバーだった。ちなみにシシーにとって「姪」、娘のホイットニーにとって「いとこ」にあたるディオヌ・ワーウィックは「USA・フォー・アフリカ」にも参加したトップ・シンガー。元々彼女は、叔母のシシーらとグループ活動をしていたが、その後ディオヌはバート・バカラックに見出され独立。ヘドント・メイク・ミー・オーヴァーヘアルフィーなどのスタンダード曲を世に放った。

母シシーがたびたびバック・シンガーとして支えたアレサ・フランクリンは『ディーヴァ〜ホイットニー・ヒューストン物語』（東京FM出版）の著者、ジェフリー・ボウマンに対し、このように語っている。

「あの子はいつもいたわ。私の目の前にね。あの子はいつも歌いたがっていた。当時からそうだったのよ。いつも母親のことをじっと見つめていて、小声で一緒に歌っていた。かなりの素質があったわ。隅っこでいつもハミングしながら、自分の聴いた音をマネしよう

としてのたの。私もスウィート・インスピレーションズのメンバーになる、なんて言っていたものよ」

アレサとシシーの間に存在するとされる感情的なトラブルは、今やゴシップ紙の格好のネタとなっている。ともあれシシーは仕事場（レコーディング・スタジオ）に、幼いホイットニーをよく連れて向かったようだ。

2016年現在もゴスペル歌手として貪欲に活動する母シシーにとっては、姪ディオナヌや、アレサなど周囲のスーパースターに比べ自分自身のソロ・キャリアが軌道に乗らないことが強いストレスだったようだ。彼女の愛娘ホイットニーは成長することに——まるでシシーの歌手人生と反比例するかのよう——周囲からの注目と評価を高め、勢いよく「女王」の階段を上っていった。その中で「頼れる母親」「ご意見番」として支配欲を高め、ホイットニーを牽制し続けたと言われるシシー。この母娘の愛し合いながらもヒリヒリとしたライバルのような関係性は双方を傷つけ、後にホイットニーの人生を転落させてゆく大きな要因の一つとなったと言われている。

ホイットニーの父親ジョンは、パートタイムでニューアーク市職員の仕事をしながら、シシーを中心とするいくつかのアーティストのマネジメントを担当していた。ヒュースト

ン家の生活はあくまでも他の黒人家庭に比べれば、経済的に恵まれていたようだ。しかし、シシー・ヒューストンの裏方歌手としての業界内での高い評価、猛烈な忙しさに比べ、得られる収入と一般的な名声はいつまでも低く、その実力に見合わないままだった。マネージャーであるジョンは才能ある妻のキャリアを発展させられず、音楽業界のみでは生計を立てられない自分の不甲斐なさを責めたようだ。両親それぞれの挫折は、夫婦間の火種の元となり家庭内で言い争いが絶えなくなった。

ホイットニー・ヒューストン —— 容赦なく、徹底的に

1977年の終わり頃、父ジョンは14歳のホイットニーと二人の兄を置いて、家を出た。ジョンが10分ほど離れた小さなアパートに移り住んだ時、最も嘆き悲しんだのは「パパっ子」のホイットニーだったという。この頃シシーは、ジャーナリストで伝記作者のJ・ランディ・タラボレッリに対し、このように語っている。

「特にシヨー・ビジネス界にいる母親が子供を育てるのは、難



《Presenting Cissy Houston》(1970年)

しいものです。ベストは尽くしているんですけどね。お金を稼ぐためにツアーに出ている間は一緒にいてやれないでしょう。だから時々、この仕事を辞めて『本当の仕事』を探そうかと考えたりもしますよ。私がいなくて寂しい思いをさせているのはわかっています。子育ては神が女に与えた大事な仕事だと思っただけですが、同時に自分の目標や望みも叶えてゆきたいんです。私は二つのバランスを一生懸命とって、綱渡りをしているようなものです」

1978年2月18日。

マンハッタン西43丁目のタウン・ホール。母親のステージにゲストやサポートとして登場しながら、そして様々なレコーディングにバックキング・コーラス隊として参加しながら、歌手としてのキャリアを磨いてきたホイットニー。14歳の彼女はこの夜、シシーの計らいで初のソロ・パートを与えられた。ホイットニーは、シシーからその時受けたアドバイスを後年このように振り返る。

「『チャンスを最大限に生かしなさい。容赦なく、徹底的にやりなさい。もし私があなただの立場にいても、やはり容赦なく、徹底的にやりますから』ってママが言ったの。別の言葉で言えばママは私に、母親のステージだからといって遠慮なくベストを尽くせ、母親を圧

倒してもいいのよ、って言いたかったのね」

この時期、映画『サタデー・ナイト・フィーバー』の空前のヒットで世に吹き荒れたデイスコ・ブームに乗って、シシーはソロ・シングルへシンク・イット・オーヴァーを発売している。彼女の Powerful なヴォーカルが炸裂するこの曲はデイスコを中心にスマッシュ・ヒットしたが、1978年、アルバムを発売して間もなくしてなんと所属レコード会社「プライベート・ストック」が経営不振のため倒産。シシーのソロ・シンガーとしてのキャリアは、いつもアクセルを踏み「ここぞ!」という場面で急ブレーキが踏まれることの繰り返しだった。

1980年。

16歳になり美しく成長したホイットニーは、母シシーとともにニューヨーク七番街のカネギー・ホール付近を歩いている時、フリー・カメラマン、デイーン・アヴェドンにスカウトされる。当初はクリック・モデルズに、その後、世界最大級のエージェント「ウイヘルミーナ・モデルズ」に移籍した彼女は『ヤング・ミス』『コスモポリタン』『グラマー』といった一流誌でモデルとして活躍することになる。スプライトやレブロン化粧品などの広告など大きな仕事も与えられたが、彼女の夢は「モデル」ではなくあくまでも「歌手」

だった。音楽的に恵まれた周囲の環境もあり、高校時代にはすでにソロ歌手としてのレコード契約を持ちかけられてもいる。しかし、音楽ビジネスがいかに厳しいものかを知り尽くした母シシーは「とにかく高校を卒業してから」という強い姿勢を崩さなかった。とは言え、ホイットニーの美貌、完璧なプロポーション、そして母親譲りの類い稀なる歌唱力、そして何より若さ溢れる魅力を、生き馬の目を抜くレコード業界の新人発掘部隊が放っておくわけはなかった。

複数のメジャー・レーベルの争奪戦の後、ホイットニーがクライヴ・デイヴィス率いるアリスタ・レコードと契約を交わしたのは1983年4月、19歳の春のことだ。後に彼女が鮮烈なデビューを果たした時、普段は極めて冷静な『ニューズ・ウィーク』誌でさえ「どんな人だってこれほどまでのスター性を備えているべきではないような気がする。不公平にも思える」と褒め称え、『ピープル』誌も「この女性がメガスターになるのを押しとどめるには国会の法案が必要だろう」と絶賛したほどの逸材だった。

ホイットニー・ヒューストン —— 「戦略」に抱かれて

デビューを控えたホイットニーを支える制作・宣伝スタッフも「これで売れないわけが

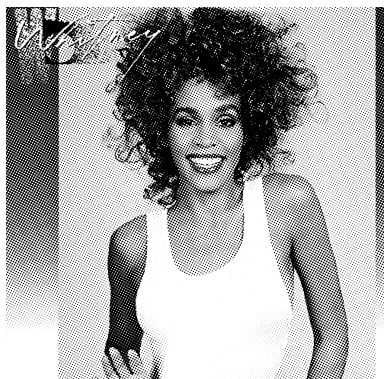
ない」百戦錬磨の鉄壁の布陣で固められた。デビュー前の一年間で、25万ドル（当時のレートで6250万円）もの莫大なプロモーション、制作費をかけたことには社内からアーティスト長クライヴ・デイヴィスに対して「失敗すればどうするつもりだ」と批判もあったという。それらの雑音が杞憂に終わったことは後世の歴史が証明している。

しかし、だ。クライヴ・デイヴィス直々の最優先プロジェクトでありながら、なぜホイットニーは1983年4月の契約からデビュー・アルバムが発売まで、1年10ヶ月もの時間をかけて戦略が練られなければならなかったのか。美しい女性にとって「若さ」がアドバンテージになりうるエンターテインメントの世界で、準備期間がいささか長過ぎる気もする。その理由と背景に関しては、彼女を担当したアリスタの「A&Rディレクター（新人発掘や制作、宣伝までも統括する役目）」ジェリー・グリフィスが、作家のマーク・ピゴに語った言葉が最も正確に言い当てているかもしれない。

「正直、どうしたらいいのかまったくわかっていなかったんだ。後から振り返ってみて、『そうだな、ホイットニーにはこういう曲が必要だ』っていうのは簡単さ。でもあの当時は本当に難しかった。彼女の声は曲の中で起こっていることをしっかりと伝えてくれていて、しかも、その声は圧倒的だった。つまり、曲が声に追いつかなくてはならなかったんだ」

ただ今にして考えると「どんな曲でもハマってしまいがゆえに却って方針が決めづらい」「曲が声に追いつかなければいけない」というデビュー前のスタッフの苦悶は、将来のホイットニーを暗示していたように思える。彼女はその歌唱力で、どんな歌でもまるで「スーパー・モデルが様々なファッションを身にまとう」ように歌いこなした。ホイットニーの後半生の突然の迷走と転落は、ポテンシャルに恵まれた彼女自身がすべてを手中に収めた後、「自分の目指すべき姿」を探しあぐねた結果なのかもしれないと思う。

アリスタ・チームにとつて、ホイットニーはすでに「それなりに売れる」だけでは許されない存在となっていた。アレサ・フランクリンやダイアナ・ロスのように長く愛され続けるスーパースターになるべきだ、と。満を持して1985年2月、爆弾級のデビュー・アルバム《そよ風の贈りもの》を引っ提げて鮮烈にメジャー・シーンに登場したホイットニー・ヒューストン。その人気は、1985年から1986年にかけてデビュー・アルバムからナンバーワン・シングルを4曲生み出すなど驚異的なレベルにまで達する。



《ホイットニーII》(1987年)

しかし、彼女の成功譚は「1985年1月28日」、つまりヘウィ・アー・ザ・ワールドの録音には間に合わなかった。ものの試しに脳内で入れ替えて想像してみてもほしい。例えばシンディ・ローパーが担ったブリッジ・パートの高音フェイク「ヤイヤイヤヤー」を、満面の笑みを浮かべながら「容赦なく徹底的に」歌い上げる瑞々しいホイットニーの姿に、仮に録音が一年後なら、いや、もしもアリストタがスピーディに戦略を固め、ホイットニーのデビューが一年早ければ……。今、我々が知るのとは違うヘウィ・アー・ザ・ワールドもありえたのかもしれない。そうなればホイットニーの運命も変わっていただろうし、彼女と彼女が全力で愛した娘ボビー・クリステイナが迎えることとなる悲劇的な死までの顛末も違うものになっていたかもしれない。

ホイットニーが伴侶ボビー・ブラウンと出会って以降の後半生に関しては、第5章で触れる。

マドンナ —— ロサンゼルスには、いたけれど

少々不思議なのは、「USA・フォー・アフリカ」におけるマドンナの不在だ。

実はヘウィ・アー・ザ・ワールドの収録直前に行われた1985年度の「アメリカン・

ミュージック・アワード」において、マドンナはヒューイ・ルイスと並び機嫌よくプレゼンターとして登壇。プリンス&ザ・レヴォリューションの面々に「フェイバリット【SOUL/R&B】アルバム部門」賞（サウンドトラック盤《パール・レイン》）を手渡している。テーブルに前のめりの姿勢で左ヒジを何度もつき運つ葉なイメージでだらしなく喋るマドンナの姿は、権威に媚びないアウトローとしてスターダムへのし上がっていたデビュー期の彼女らしくて微笑ましい。ともあれ、彼女は収録日の夜にロサンゼルスにいたわけだ。

なぜ、その時期、シングル《ヘライク・ア・ヴァージン》でまさにシングル・チャート首位の座を手中に収めていたマドンナはアメリカ代表とも言っている「USA・フォー・アフリカ」計画に参加しなかったのだろうか？

マドンナ、本名マドンナ・ルイズ・ヴェロニカ・チッコーネは、1958年8月16日、ミシガン州ベイシティで誕生している。その名は母マドンナ・ヴェロニカから譲り受けたものだ。

「マドンナは母の名前よ。母はあたしがまだ小さかった頃に死んでしまったし、母のことが大好きだったから、同じ名前だっただけでもあたしには大きな意味があるの。母は優しくて、美人で、よく働く人だった。時々自分がどのくらい母に似てるだろう、って考

えるのよ。そんなのわかりっこないのに。——イタリアカトリック教徒の女性が娘に自分の名前をつけるのは珍しいのよ。しかもマドンナなんて変わった名前だし——だからもしかしたら、母はあたしがほんの子供の頃に死ぬ運命だったのかもしれないわね。でも、なんらかの形で、彼女の魂はあたしの中にあるわ」

彼女が語るとおり、マドンナが6歳の時、母マドンナ・ヴェロニカは乳がんで亡くなっている。マドンナには、兄がふたり（アンソニー、マーチン）と、弟がひとり（クリストファー）、二人の妹（ポーラとメラニー）がいる。母がこの世を去ると、父親が雇った家政婦達に6人の子供達は悲しみの反動からか、しぶとく反抗を続けたという。母を亡くして二年後、父トニーが入れ代り立ち代りやってくる家政婦の中のひとり、ジョーンと再婚する決意を固めたことで、家庭内でのやりきれなさは更に増してゆく。父はジョーンを「ママ」と呼ぶように、と子供達に要求したというが、マドンナは新しい「母」を受け入れなかった。

「「ママ」なんて口が裂けてもいえなかったわ。呼びにくいなんてなまやさしいものじゃなかった」

その後、父とジョーンの間に異母妹のジェニファー、異母弟のマリオが生まれると、チッコリーネ家は子供が8人もいる大家族となった。長女のマドンナは10代のほとんどを赤ん

坊の世話で過ごしたようなものだ、とのちにインタビューで語っている。まるでシンデレラのようなだった、すべてから逃げ出したい、そう願うばかりだったとも。

しかし、10代の彼女にはただひとつ夢中になれるものがあつた。それは、ダンスだった。

マドンナ —— 「彩られた」経歴

マドンナは幼少期の暮らしをこのように回想する。

「父はとても厳格な人で、しつても厳しかったわ。子供達は学校の前に必ず教会に行かされたのよ。十六、七になるまでテレビも見せてもらえなかった」

「父は6人兄弟の末っ子で、ひとりだけ大学に進学したの。だからあしたちができるだけいい教育を受けることは父にとつても大事だったのよ。ミシガン大学の奨学金を途中で蹴つて、『大学になんて行きたくない。ニューヨークに行つてダンサーになりたいの』って言ったとき、父にはそれがまともな話に思えなかったの」

マドンナはマイケル・ジャクソン、プリンスと同年。しかし、マイケル・ジャクソンはわずか11歳にして「ジャクソン5」のリード・シンガーとしてエンターテイメント界の頂点に到達。プリンスにしても、わずか19歳にして全楽器を演奏し、プロデュース権まで

もを獲得しての破格のデビュー。このふたりに比べれば、25歳になる直前、1983年7月にデビュー・アルバム《バーニング・アップ (Madonna)》をようやくリリースしたマドンナは、かなりの遅咲きと言っていいだろう。

野心に満ちたマドンナは、19歳にして故郷のミシガン州からニューヨークに35ドルだけを握りしめてほぼ文無しの状態で「上京」。20代前半を通じて、ドーナツ屋のウェイトレス、高級レストランで帽子を預かるクローク、そしてヌード・モデルまでに至る様々なアルバイトを繰り返しながらチャンスを探るための努力を続けていた。時にはマクドナルドの残飯を拾って飢えを凌ぐこともあったという。

2013年、『Harper's BAZAAR』誌にマドンナ自身が寄稿したエッセイによれば、更に過酷な現実が下積み時代の彼女を襲ったようだ。

「ニューヨークではなかなか思い描いたようには行かなかったわね。あの街が私を歓迎してくれたってわけじゃなかった。まず一年目。拳銃を突きつけられ強盗に遭った。ナイフを背中に突きつけられ、建物の屋上にまで引きずり出されて、そこで強姦されたの。自分のアパートにも三度空き巣が入ったけど、全然意味がわからなかったわ。だって彼らが最初にあたしのラジオを盗んでから、もう部屋には何にもなかったんだもの」

しかし、これら数多くの「マドンナ伝説」に関して異を唱える近しい者もいる。マドンナの実弟クリストファー・チッコローネは、自らの著書『マドンナの素顔』（ぶんか社）でこのように記述している。

「それにしても、たった35ドルを握りしめてマンハッタンに乗り込み、ほかに行くところがなくてタイムズスクエアに降り立った——これは神話というほかない。まず第一に中流家庭の子女であるマドンナにはマンハッタンに大勢の知り合い（ダンサーやインスタラクターなど）がいた。それに、カチカチのパンの耳すら食べられず友人もいない小さな迷い猫どころか、お金もあり、支援体制もばっちり整っていたのである。ひよっとしたら、本当にミュージック・ビルディング※で一夜を明かしたことがあったのかもしれない。だが、それとてプロデューサーかミュージシャンの目に留まることを期待しての行動だろう。神話……そう、マドンナが語れば語るほど、マンハッタンへの初めての旅は、神話の色合いを深めてゆく。ぼくはつい、経歴を飾り立てた女流作家、アナイス・ニンを思い出してしまう」

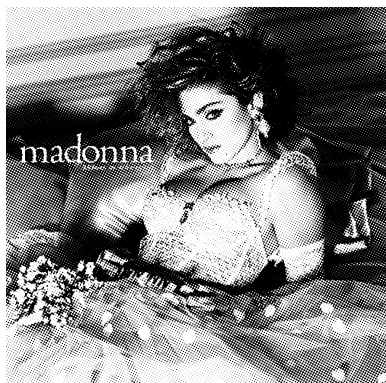
1983年、シングル〈ホリデイ〉をビルボード・HOT100・チャート16位にした後、9月の〈ヘラッキー・スター〉（4位）、84年2月の〈ボーダーライン〉（10位）の連続ヒットによってマドンナは20代後半にしてようやく成功のレールに乗った。ただし、改めて彼

女のキャリアを調査し直してみると、真の意味でマドンナが「80年代ポップの女王」として覚醒し、君臨し始めたのは1984年11月12日にリリースされたセカンド・アルバム《ライク・ア・ヴァージン》と、同名シングルの特大ヒットからだ、ということがわかる。つまり、彼女が「女王」の座を不動のものとしたのは実質的には「1985年」なのだ。

※1…マンハッタンにあるミュージシャン専用のリハーサルスタジオを多数備えた建物

マドンナ——「USA・フォー・アフリカ」を蹴落とす

シングル《ライク・ア・ヴァージン》は、84年12月22日付でチャート首位を初めて獲得。年が明けて6週間その座にとどまる。その後、矢継ぎ早にアルバムからカットされたセカンド・シングル《マテリアル・ガール》も「85年春」に2位に浮上。その意味では、もしかするとマドンナは「85年1月」の時点ではいささか「旬」そのもの過ぎた。84年12月に急遽動き出した「USA・フォー・アフリカ」に誘われるには、ほんの少しだけタイミングが遅かったのかもしれない。



《ライク・ア・ヴァージン》(1984年)

ちなみにシンディ・ローパーのデビュー・アルバム《シーズ・ソー・アンユージュアル (She's So Unusual)》がリリースされたのは、《ライク・ア・ヴァージン》発売よりも一年以上早い1983年10月のこと。彼女はヘウィ・アー・ザ・ワールドのドキュメンタリー映像でも先輩達の迫力に戸惑うことなく、その自由奔放なキャラクターとチャーミングな笑顔で最大の注目を集めている。

シンディは女性の社会的地位に対する賛歌《ガールズ・ジャスト・ワナ・ハヴ・ファン》(2位/1984年度年間15位)でデビューするやいなや大旋風を巻き起こしただけでなく、1984年6月には珠玉のバラード《タイム・アフター・タイム》でマドンナよりも半年早くチャート首位を獲得している(1984年度年間17位)。アルバム《シーズ・ソー・アンユージュアル》も1984年度年間11位の大ヒット。つまり、「USA・フォー・アフリカ」計画時点では「やんちゃな新進気鋭の女性シンガー」としてのライバル関係にありながらも、チャートでの成績はマドンナよりもシンディの方が圧倒的に「格上」だった。実際、両者がノミネートされて競っ



《シーズ・ソー・アンユージュアル》(1983年)

た1985年1月28日夜の「アメリカン・ミュージック・アワード」の「フェイバリット【POP/ROCK】女性アーティスト部門」でも、マドンナはシンディに敗れている。

そしてもう一つ、今回調べるうちに興味深いことがわかった。マドンナは「USA・フォー・アフリカ」の選考とやり取りが大詰めを迎えていた1985年1月下旬にプロモーションのため初来日しているのだ。この時、彼女は1月21日に生放送の「夜のヒットスタジオ」に出演しヘライク・ア・ヴァージンを披露、松本伊代さんが司会を務める「オールナイトフジ」などでもパフォーマンスした後、各種取材をこなしている。

この時、彼女にインタビュした音楽評論家・湯川れい子さんから直接聞いた話によると、なんとデビュー当時のマドンナ、日本での取材時に「ハワイかどこかで拾ってきた（マドンナ談）」若い男を隣にはべらせ、終始男の膝と太ももをなでまわし、さすったりしながら湯川さんの質問に答えていたとのこと。この時の二人の会話で、興味深いのが4月から予定されていた「ザ・ヴァージン・ツアー」コンサートのメンバーを日本に来る前にオーディションしたが、その選定をマドンナが「覚えられないほどの人数が集まったけれど、自分一人で決めた」と強調していることだ。次作のプロデューサーも彼女は「自分で決める」と言い切っている。

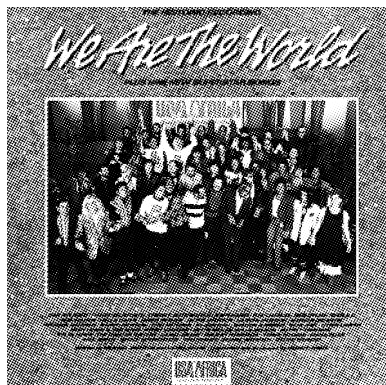
ネットやメールのない時代だ。もちろん「アメリカン・ミュージック・アワード」授賞式のある1月28日には彼女はロサンゼルスに戻っていたわけだが、クインシー・サイドが遠く離れた日本に出ているマドンナ・チームとデモテープや楽譜の送付などが出来なかった事態も予想できる。マドンナのヘウィ・アー・ザ・ワールドへの不参加の理由の一つに日本キャンペーンがあるとすれば、それはそれでポップ・シーンの行方を変えた出来事として面白い。

最後に僕自身はこの時期（選考がなされた1985年1月中旬までの時点で）、まだマドンナが「歌手」としてまともに認識されていなかったことも最大の理由だと思う。マドンナのシンガーとしての魅力は低音の響き、強さと憂い、茶目っ気のバランスにあるが、そんな彼女の声質が生かされた初めてのバラード・シングルヘクレイジー・フォー・ユーがナンバー・ワンに輝くのは、その年の5月11日のことだ。くしくもシングルヘウィ・アー・ザ・ワールドを首位の座から蹴落としたのは、マドンナのヘクレイジー・フォー・ユーだった。

ジャネット・ジャクソン —— 異なる運命

そして、〈ウェイ・アー・ザ・ワールド〉に呼ばれなかった「新人」、三人目がジャネット・ジャクソンだ。

彼女の「USA・フォー・アフリカ」への不参加はマドンナ以上に不思議なものがある。なんと言っても〈ウェイ・アー・ザ・ワールド〉の作詞作曲をライオネルと共に担当し、一番サビとブリッジの美味しい部分を歌った彼女の兄マイケル・ジャクソンこそが、このプロジェクトの「主演俳優」であり中心人物そのものだったからだ。録音チームも、クインシー・ジョーンズを筆頭に鍵盤奏者のグレッグ・フィリングインズ、ベースのルイス・ジョンソン、ドラムのジョン・ロビンソンなど「チーム・マイケル」で固められている。アルバム・ジャケットを眺めてみてほしい。右側前列にコーラス隊のジャッキー、ティト、マロン、ランディのジャクソン兄弟が参加しているだけでなく、他の錚々たる面々に比べると圧倒的に実績の足りない次女ラトローヤまでもが最前列にいる。



《ウェイ・アー・ザ・ワールド》(1985年)

レコーディング・アーティストという観点で見れば、この時点でラトーヤは1980年のデビューからアルバム3枚のキャリア。ジャネットは16歳で「A & Mレコード」と契約し、1982年9月の《ヤング・ラヴ (Janet Jackson)》、マーロンやマイケルなど兄達の間も借りた1984年10月の《ドリーム・ストリート》と2枚のアルバムをリリースしていた。なぜジャネットは、この夜呼ばれなかったのだろうか。

ラトーヤ・ジャクソンの自伝『インサイド・ザ・ジャクソン・ファミリー——ラトーヤ・ジャクソンが語るファミリーの真実』（オオカワ・コーポレーション）には、「USA・フォー・アフリカ」へのオファーについて興味深い記述がある。

「ランディ、ティト、マーロン、ジャッキー、マイケルの五人といっしょに、あたしも〈ウィ・アー・ザ・ワールド〉のパートを歌ってほしいとのクインシーの要望をマイケルから聞かされたとき、あたしは驚くとともに光栄に思い大よろこびした（ジャネットとシャーマインには誘いがなかった）。クインシーはときどきあたしをいろいろなプロジェクトに加えてくれた。フランク・シナトラの歌う〈L.A. イズ・マイ・レイディ〉のビデオに登場し、デイン・マーチンとプールサイドで乾杯もさせてもらった」

この時期、ラトーヤはジャクソンズやマイケルと同じエピック・レーベルに所属してい

た。シナトラのビデオ出演などでラトローヤには直接のパイプもあったクインシーは、彼女をコーラス隊の一人として誘いやすかったのではないだろうか。当時、ジャネットは「A & Mレコード」、ジャーメインは「アリスタ」と、ソロ・シンガーとして契約中。特にプライドの高い三男ジャーメインはソロ・パートが与えられない時点で録音を円滑に進めるためにも呼ぶべきではなかった。この辺りはマイケルの判断かもしれない。

さて、ラトローヤとジャネット。このクインシーによる些細な「チャンス」の差配の違いが、後に大きな余波として二人の姉妹の命運を分けることになるとは誰も想像しなかったことだろう。この夜もしもジャネットがこのこと「USA・フォー・アフリカ」のレコーディング会場に現れていたとすれば、翌年の《コントロール》での彼女の再始動とティーンネイジャー達からの絶大な支持はなかったはずだから……。

ジャネット不在の大きな理由は、もう一つあった。1984年から1985年にかけて、彼女は人生最大の波乱を迎えていたのだ。

ジャネット・ジャクソン —— 結婚と破綻

1984年9月7日。

18歳のジャネットは家族に伝えぬままに結婚の道を選び、夫ジェイムズ・デバージの故郷ミシガン州ランドラピッズまで駆け落ちした。案の定、当時ジャクソンの「ヴィクトリー・ツアー」真っ只中で全米中を旅していた両親と兄達はそのニュースを聞き皆絶句、その後烈火のごとく猛反対したわけだが……。

ジャネットの結婚相手ジェイムズはモータウン所属の姉弟5人から成るコーラス・グループ「デバージ」のメンバーで、10人きょうだいの6男。「デバージ」は、現在までR & Bクラシックとして愛され続ける「アイ・ライク・イット」へステイ・ウイズ・ミー」など名曲を多数生み出し、ハイトーン・ヴォーカルが魅力のリード・シンガー、エル・デバージを中心に「80年代のジャクソン5」のキャッチフレーズで売り出されていた。リズムのしなやかさと、恍惚のコード感。そのあまりにも絶妙なブレンド具合は、彼らの母がアフリカ系とネイティヴ・アメリカンの間に生まれたゴスペル・シンガー、そして父がフランス系カナダ人とイギリス人の両親を持つ、というバックボーンがもたらしたものかもしれない。

そもそもデバージ家を、モータウンに引き寄せたのはジャネットの兄ジャーメイン。最初のきっかけは、ジャーメインがデバージ家の年長の兄ふたりを含む「スウィッチ」とい

うファンク・グループをフックアップし、呼び寄せたことに始まる。しばらくして、モータウンがデバージ家の年少の姉弟に可能性を感じたことで、デビューに至っていた。あのバート・バカラックが彼らのヘオール・デイス・ラヴをラジオで聴き、あまりにも美しいメロディに驚き電話をしてまでして問い合わせた、というエピソードもよく知られている。

ジャネットは15歳の時、テレビ音楽番組「ソウル・トレイン」のセットの中で、生意気ながら可愛げのあるキャラクターでアイドル的人気を誇ったグループ最年少のジェームズと出会った。家族間の関係性が深かったこともあり、それまでも電話で話したことがあったようだ。偉大なきょうだいを持ち、幼い頃から芸能の世界に暮らさざるを得なかった互いの境遇を照らし合わせるかのように、ふたりは恋に落ちた。

長女リビーが当時の状況を回想している。

「弟たちはちょうど『ヴィクトリー』ツアーの真ただ中で、母さんも一緒にロードに出ていたわ。高校を卒業したばかり



《オール・デイス・ラヴ》(1982年)
写真左下がジェームズ・デバージ

のジャネットは家で一人だったのね。そんな心の隙間に、幼友達のジェイムズ・デバージ、あの、歌手のデバージ・ファミリーの一人が入りこんだのよ。

気がついたら二人は、ジェイムズの出身地であるミシガンに駆け落ちしてたわ。私はラジオでそのニュースを聞いたの」

マイケルは、自伝『ムーンウォーク——マイケル・ジャクソン自伝』（河出書房新社）で、ジャネットとの関係性をこのように記している。

「ジャネットは、いつだっておてんばでした。彼女が一番長いこと、家族の中では僕のベスト・フレンドでした。ですから、彼女が僕らのもとを離れて結婚していくのを見るのは、死ぬほど辛いことだったわけです。（中略）ジャネットがそばにいて、僕も特に仕事がない時には、僕らは本当にびったりと一緒にいたものです。しかし、いずれは別々の趣味を持ち、違うものに愛着を感じていくのだということにはわかっていました。それは避けられないことだったのです」

ジャネット・ジャクソン —— 「ジャクソン」の名を捨てて

しかし、この双方ともに若過ぎた結婚は早々に破綻する。普段は気の優しい夫のジェイ

ムズだったが、彼の最大の難点はコカイン中毒者だったことだ。そして多数の魅力的な女性達が若きプレイボーイ、ジェイムズを狙っていた。結婚早々、真夜中のゲットーに入り浸り、酒と麻薬に溺れ、自宅に戻らない夫……。ジャネットは深夜、ジェイムズの仲間から連絡が来るたびに、暗く危険な街に彼を車で探しに行く日々を重ねた。

1985年1月7日。

ストレスから神経衰弱状態となり病院に担ぎ込まれたジャネットは、ようやく家族の説得を受け入れる。最後の説得者は、ジャネットを無二の親友のように愛したマイケルだった、と言われている。彼女は結婚を無効とする申し立てを裁判所に提出。「USA・フォー・アフリカ」のレコーディングのほんの少し前のことだ。ジャクソン家とデバージ家、ポップ・シーンの新旧ロイヤル・ファミリーの間に生まれたすべてのゴシップにメディアは飛びついた。

ジャネットは語る。

「わたしの人生のすべてが堕ちていくような気がして、それにもう一人の男も墜ちていくが見えたの。でもわたしにはどうすることもできなかったわ。そしたら、ジェイムズはわたしに言ったの。『君は僕を助けてくれなかった』って。でも思ったの。『自分自身で助

けたらどうなの?』ってね。一緒に落ちぶれて、わたしの人生が終わるか、それとも抜け出して自力でやっていくか」

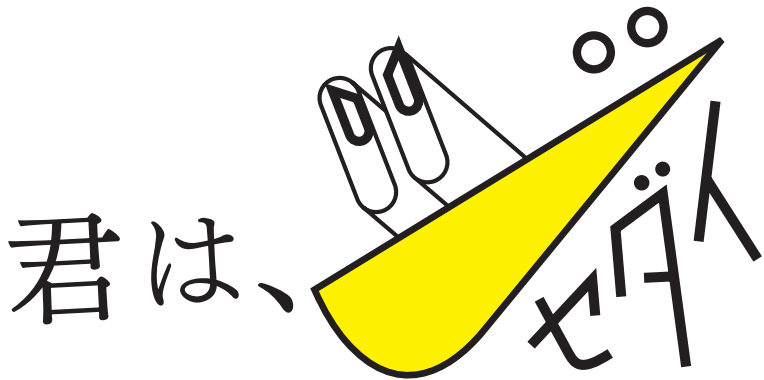
ボロボロになりながらジェイムズとの関係を断ち切ったジャネットは、この時期もう一つの大きな決断をする。自分の芸能人生をコントロールし続けてきた父親ジョーを、マネージャーから外したのだ。

そして1985年8月。

父親の猛反対を押し切って、19歳のジャネットは彼女自身が選んだ新しいプロデューサー、ジミー・ジャム&テリー・ルイスがスタジオを構えるミネアポリスへと旅立った。彼女の真のデビュー作とも言えるアルバム《コントロール》を制作するために……。

ホイットニー、マドンナ、そしてジャネット。

三人はヘヴィ・アー・ザ・ワールドに、それぞれの理由で呼ばれなかった。しかし、だからこそ、80年代後半から90年代にかけての「メジャー音楽シーン」を牽引する役割を果たす切符を手にすることが出来たと僕は考えている。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!